

經濟論叢

第七十七卷 第六號

經濟政策學の理論的性格……………豊崎稔(1)

ロイツ船級協會……………谷山新良(28)

マルクス—エンゲルスのイギリス革命論(2)……尾崎芳治(49)

マルクスとウェーバー……………堀江英一(71)

〔昭和三十一年六月〕

京都大學經濟學會

マルクスとウエーバー

——出口勇藏編『歴史學派の批判的展開』を中心として——

堀 江 英 一

最近わたしたちはドイツ帝國主義時代についての二つのすぐれた著作をめぐまれた——

大野英二氏『ドイツ金融資本成立史論』（有斐閣） ドイツ帝國主義の經濟的基礎分析に關する著作である

出口勇藏氏編『歴史學派の批判的展開』（河出書房經濟學說全集第6卷） ドイツ帝國主義時代のユニークな思想家マックス・ウエーバーの體系的研究である

これらの二つの著作は、それらがとりあつかっている對象の連關からして密接に關連しているばかりでなく、後者の二・三の執筆者が大野氏の經濟分析を引用しそこからウエーバーを位置づけているという風に、直接的な連關をもつていのである。

さて、わたしは後者すなわち出口氏編『歴史學派の批判的展開』について書こうとしているのであるが、しかしわたしはここでいわゆる「書評」を書くつもりはない。「書評」というの

はその書物の評價をきめることであつて、この場合についていへば、この書物がウエーバーをただしくつたえているかどうか、ウエーバーをただしく評價しているかどうか、を検討し評價しなおすことである。わたしはそのためには執筆者以上の、少くとも執筆者同等のウエーバー理解をもつていなければならぬが、いくら欲目でみてもわたしには殘念ながらそうした資格はなさそうである。だが、わたしにもできるし、またする自由をもつている領域がある——それは、このウエーバー研究がわたしやわたしたちのもつている問題にどのようにどのぐらい答えてくれているかということである。これはわたしたちがこの書物からなにを吸収するかの問題であつて、いわば執筆者から獨立したわたしたちの自由の領域である。

わたしは、ここで、この自由を行使させていただくことにするが、このウエーバー研究はわたしたちがこの自由をたのし

める研究である。

一

わたしがこれから書くつもりでいることは、いまもいつたように、このウエーバー研究がわたしたちの問題にどのようなにどのくらい答えてくれるかということであるが、そのまにあらかじめわたしたちの問題について語る必要がある。問題というのは「マルクスとウエーバー」との関連である。

わが國の學界ではウエーバーはきわめて重要な位置をしめてゐる。ブルジョアの社會科學がウエーバーを方法的よりどころとしたところで、わたしたちには何の不思議もないが、いわゆる進歩的な社會科學がウエーバーを重要なよりどころとしている。いわゆる進歩的社會科學は、ある意味では、ウエーバーを軸としているといえるであらう。

わたしがそれぞれの専門家である友人からたしかめた二・三の例をあげてみよう――

經濟學畑。この畑での著例は大塚史學と大河内社會政策であらう。大塚史學はマルクス＋ウエーバー＋トニーの公式のうえに成立した經濟史學であつて、ウエーバーを環にしてマルクスとイギリス勞働黨理論が結合させられているし、大河内社會政策ではマルクス＋ウエーバー＋コールという寄せ算がなされ、ウエーバーをなかにたててマルクスとイギリス勞働黨理論とが

むすびつけられている。

法學畑。政治學でのマルクス＋ウエーバー＋ラスキもおなじことであり、いわゆる法社會學がマルクスとウエーバーとの混合のうに成立していることは周知の通りである。

このようにみてくるとき、わたしたちはウエーバーがわが國の進歩的社會科學といわれているものなで果している役割におどろくし、またその役割がマルクスを第二インターナショナルの理論にひきわたすことにあることに氣づくのである。

さらに、わたしたちはいま實例としてあげた理論の多くがいわゆる講座派理論の系統をふむと思つていたが、しかしそれらは講座派理論がともかくにも守ろうとした魂をぬききつて停滯論という外形だけを殘したものであることに氣づくのである。

わたしたちの問題はここからうまれてくる。こうした寄せ算ができるのであらうか――この疑問はわたしたちばかりでなく多くのひとびとのもつている疑問であらう。編者出口氏のなづける「いきのよい青年學徒」のように、ウエーバーは帝國主義者であるときめつけてみたところで（三二七頁）、この疑問にこたえることにならない。というのは、いま實例をあげたひととは帝國主義者であるところか、その反對側のひとびとであるからである。わたしたちの疑問に對しては、おそらく二段の答辯が必要であらう――

〔一〕ウェーバーのどこかにわたしたちの希望をつなぐものがあつて、それがマルクスとウェーバーとの結合を可能にしているの
でなからうか？ このことは、たとえばウェーバーの『プロテ
スタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』を讀んだひとびと
には、すぐ理解していただけるであらう。ウェーバーのなかに
あるマルクスへ親近するものが説明してはしいことである。

〔二〕だが、それにもかかわらず、マルクスとウェーバーとで親近
するものが、マルクスとウェーバーとでは全く反對の方向を志
向しており、反對の結論にむすびついているだらうこと、した
がつてマルクスとウェーバーとの寄せ算が本來不可能であらう
ことも、わたしたちは直観している。このことをハッキリして
くれるウェーバー研究がほしい。

わたしはこうした素人くさい欲望をもつてこのウェーバー研
究を讀むことにした。この研究の位置づけというような大それ
たことはわたしにはできないにしても、この研究がわたしの欲
望をみたしてくれるかどうかをわたしは判斷できるであらう。

二

このウェーバー研究はつぎの八つの章からなつてゐる――

第一章 初期のマルクス・ウェーバーにおける經濟政策論

山口 和男

第二章 マルクス・ウェーバーの農業經濟論

山岡 亮一

マルクスとウェーバー

第三章 マルクス・ウェーバーの經濟學方法論

出口 勇藏

第四章 マルクス・ウェーバーの『經濟史』

秦 玄龍

第五章 共同體の構造と歴史的諸形態

住谷 一彦

第六章 ウェーバー宗教社會學の基礎視點

越智 武臣

第七章 ウェーバーの政治的立場

田中 眞晴

第八章 ウェーバーの民主主義

平井 俊彦

この書物はこれら八人の八つの論文の體系的統一であつて、こ
れら八人のうち七人までは個人的に交際もありその思考方法も
多少とも知っているの、それだけわたしにとつてはこの書物
は親しいものになつてくる。

さて編者出口氏の『編者のことば』によれば、これら八つの
論文は次の順序で體系的に統一されているようである。

第一・第二章――ウェーバーの初期の經濟學研究の中心課題東エ
ルベの農業勞働者問題を中心とする解説で、一八九五年の

『國民國家と國民經濟政策』が展望されている。

第三・四・五・六章――『國民國家と國民經濟政策』で包括的

に方向づけられたウェーバー的方向が、一九〇二年以來、完
成されてゆく各分野すなわち方法論（理念型理論）・その方
法の適用たる宗教社會學（とくにプロテスタンティズム研
究）・經濟史・社會類型論（共同體論）が研究されている。

第七・八章――いままで説かれてきた各分野の研究を「實質上」
ささえているウェーバーの政治論が當時の政治情勢と関連さ

せて、研究されている。とりわけ第一次世界大戰末期および直後の革命情勢のなかでレーニンのコースと對比させてウェーバーの政治的立場が説明されている。

この書物は、外形としては問題別の羅列的研究のようにみえるが、しかしそうした外形はウェーバー自身の思想的發展によつて順序づけられ、それに従属することによつて體系化されている。

三

さて、このウェーバー研究はわたしの欲望をどのように満たしてくれているだろうか？ まず第一に、ウェーバーのなかでマルクスに親近なものと考える要素を、執筆者たちはどこに發見しているであろうか？

山口氏は東エルベの農業労働者調査からのウェーバーの政策的結論を、レーニンのプロシヤ型の道に對抗するアメリカ型の道に關連させて、つぎのように評價している。そしてこの評價はそのまま山口氏の評價でもある。山口氏はこういう——

「ウェーバーが、『國家理念』の觀點から、現實主義的政策として提案したものは、……東部國境の開鎖とともに王領直營地への自營農民の入植、『上から』の農民的土地所有の創設であつた。……ニンカー的な農業資本主義の發展に對して、農民的農業資本主義の道、農業労働者が自由に、自發的な労働意欲

にもとづいて労働し、しかも獨立自營農民に上昇する可能性をもち、土地への愛着を通じて祖國に對する愛情を感じるような道を、構想した」（三二—三三頁）。

田中氏と平井氏とはウェーバーのこのおなじ方向をかれの政治的立場からくみとつてくる。たとえば田中氏はウェーバーの「ブルジョア民主主義」をつぎのように解説している——

「ニンカーが、經濟的に没落しつつあり、政治を擔當する能力を喪失しながら、現實には、政治を左右する大きな力を持ち、その力を使つて、國民的利益を傷つけてまで、自己の階級的利益を計ろうとするかぎりにおいて、……ウェーバーはハツキリとニンカーの敵である。ウェーバーの反カイザー・反ニンカーの志向は、『封建遺制からの解放』の志向と呼んでいいであらう。言葉をかえれば、ブルジョア民主主義的志向である」（二七四頁、その他多數の個處參照）。

こうして執筆者はすべて——すべてといつてよいであらう——ニンカーツームに對するウェーバーの敵意すなわちウェーバーの「ブルジョア民主主義」的性格を、應評價している。執筆者のなかには、この點についての意見の分裂はみあたらない。そしてウェーバーの「封建遺制から解放の志向」＝「民主主義」的性格を評價することはたしかに重要である。わたしたちがウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』をよむとき、ウェーバーの反マルクスの方法にもかか

わらず、重要な點でウェーバーとマルクスとの一致を見つけるが、その一致はほかでもない封建主義に對する資本主義の進歩性についての兩者の一致からもたらされたのである。そしてここからマルクスとウェーバーとの結合というわが學界の大きな流れがでてくる。つまりウェーバーをマルクスに結合しようとするひとびとの祕密——大塚久雄先生のいう「ウェーバーの魅力」(本書折込)はこの反封建主義——「ブルジョア民主主義」である。

この書物は、こうした形で、わたしの欲望をみたしてくれた。出口氏はウェーバーの方法論をつぎのように要約している

「ウェーバーの方法論の問題は、……資本主義社會の人間の問題に還元して考えられなくてはならないのである」(二七頁)。

四

わたしは第二の疑問にすすもう。反封建主義——資本主義の進歩性についての一致からでてくるいくつかの一致を根據にして、マルクスとウェーバーとを結合することが果してゆるされるであろうか？ 帝國主義段階でいわば革命をはさんで敵對しているブルジョアジーの代表者ウェーバーとプロレタリアートの代表者マルクスとは、おなじ反封建主義——資本主義の進歩性についても反對の見解をもつていないであろうか？

マルクスとウェーバー

残念ながら、執筆者たちはこの問題については分裂しているようである。山口・山岡兩氏をしておそらくは秦・住谷兩氏は、第一の問題——ウェーバーとマルクスまたはレーニンとがなぜむすびつけられるかという問題にこたえているだけで、さきに進もうとしない。したがつていまいつた諸氏は、意識的にか無意識にかマルクスのウェーバー(十第二インターとなる——後述)にとどまつているといつて差支ない。これに對して、出口・越智兩氏は暗示的に、田中・平井兩氏はハッキリとマルクス主義とウェーバーとの對抗をといっている。

さきのウェーバーの「ブルジョア民主主義」の具體的態様を、田中、平井兩氏はつぎのように特徴づけている——

「第一次大戰前におけるウェーバーの政治的立場は、……自由思想進歩、とりわけそのなかのナウマン派を中核とするところの、左翼自由主義的勢力の結集(社會民主黨の修正主義は、内容的にはブルジョア民主主義である)による、保守勢力……への對抗という構想をつたのである。この構想が、その裏面に、社會民主黨の『革命的分分子』への、するどい對抗をふくんでいることに、われわれは注意しなければならない」(田中氏——二七六頁)。

「ウェーバーはエンガー・ブルジョワジーの妥協形態であるドイツ『エセボナパルティズム』に見きりをつけ、エンカーを排除してブルジョワジー——プロレタリアートの改良主義分子と

いう妥協形態を設定して、帝國主義段階におけるドイツ國民國家の危機に對處しようとした。もつとも、このようにウーバーは、どこまでもブルジョワジーを主力とする改良主義コースを、社會民主黨左翼の革命コースに對決させたのだ」(平井氏—二九九頁)。

社會民主黨左翼はマルクス主義勢力に對抗して、ブルジョア・プロレタリア同盟によるドイツ帝國主義の強化——ウーバーの「民主主義」はこうしたかれの「國家理念」實現の手段であり、それに從屬していたのである。それはもはや「ブルジョア民主主義」でなくて帝國主義的自由主義であり、ウーバーはドイツのストルヴエであつた。ロシアのカデットに相應したメンシェヴィキとおなじく、ドイツの修正主義は社會民主黨右翼はウーバーのよびかけにイエスとこたえた。ウーバーと修正主義は同質である。だから、出口氏も「清純なビュリタンとしてウーバーが描かれるときのセンチメンタリズム」が「民主主義の假面をかぶつた新しいファッシズムに對して、別段の好意を寄せている」といつている(三二五頁)。

山口氏のいうウーバーの農民的農業資本主義の道はレーニンのアメリカ型の道とは反對の性格であり、農村の階級闘争をまひさせる道であり、だからまた農村の資本主義化は階級闘争の發展をエンカーの近代化とプロレタリアートの自由への欲求とから説明して農民層の分解という必然性から説明しなかつた

のである。「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」をよむひとびとは、ウーバーが農民資本主義と近代資本主義との對抗ばかりを強調して、ブルジョアジーとプロレタリアートの對抗をビュリタニズムという宗教意識をつかつて壓殺しているのを、感ずるであらう。

これがウーバーの「民主主義」の本質である。そうだとすれば、ウーバーをマルクスやレーニンと結びつけることがどんなに不可能なことか、わかるであらう。ウーバーをマルクスに結合すること、ウーバーのなかにマルクスを讀みとらうとすることは、マルクスをウーバー化すること、マルクスを單なるブルジョア自由主義化することであり、それはウーバーと修正主義との同質性に媒介されてマルクスを修正主義にうりわたすこととなる。それは論理の必然である。

この書物はわたしの第二の欲望を立派にみたしてくれた。それはわたしに二つのことを納得させてくれた——一つはマルクスとウーバーとが反對の方向をむいていること、二つはマルクスとウーバーとの結合が必然的にマルクスとウーバーと修正主義(第二インター)という公式をつくりあげること、この二つを納得させてくれた。

さきにもいつたように、マルクスとウーバーと修正主義はわが國の社會科學の大きな流れとなつてゐる。わたしはこの書物からこの流れの悪しき系譜を讀みとることができた。だが、

わたしたちはさらに前進しなければならない——いまいつた流れがマルクス主義をどのように悪しく曲解しているかを説明しなければならぬ。

五

この書物がわたしたちに教えてくれることは、つぎのことである——

ウェーバーは嚴密な意味での「近代主義者」である。かれは、ドイツの封建主義・カイゼルツームに資本主義を對立させ資本主義の進歩性をとくが、そこまですとどまる。そこでとどまる

ということは、當時の條件のもとでは、革命化しつつあるプロレタリアートを帝國主義的ブルジョアジーに從屬させることであつた。ここに「近代主義」の本質がある。

マルクス主義は封建主義に對する資本主義の進歩性をとくが、さらに前進する。かれらは、ブルジョアジーに對するプロレタリアートの勝利を、プロレタリアートのブルジョアジーからの分裂と獨自性をとく。こののちの點で、マルクス主義は「近代主義」と決定的に訣別する。

——一九五六年四月二日稿——